

機 関 名	名古屋大学		機関番号	13901	拠点番号	D06
1. 機関の代表者 (学 長)	(ふりがなくローマ字) HAMAGUCHI Michinari (氏 名) 濱口 道成					
2. 申請分野 (該当するものに〇印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>					
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	テキスト布置の解釈学的研究と教育 Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration					
研究分野及びキーワード	<研究分野: 史学 >(仏文学)(言語学)(日本文学)(哲学)(法学)					
4. 専攻等名	文学研究科人文学専攻					
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)						
6. 事業推進担当者	計 15 名					
	※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [%]					
ふりがなくローマ字 氏 名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役 割 分 担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) SATO SHOICHI 佐藤 彰一 (66)	文学研究科人文学専攻・特任教授	西洋中世史学 博士(文学)	西洋中世歴史テキストの研究教育と全体統括			
MATSUZAWA KAZUHIRO 松澤 和宏 (58)	文学研究科人文学専攻・教授	フランス近代文学・一般言語学 博士(文学)	フランス近代草稿テキストの研究と教育			
KUGINUKI TOORU 釘貫 亨 (57)	文学研究科人文学専攻・教授	古代日本語・日本語学説史 博士(文学)	日本古代言語テキストの研究と教育			
TAKAHASHI TOORU 高橋 亨 (64)	文学研究科人文学専攻・教授	平安朝物語文学 文学修士	平安文学テキストの研究と教育			
MORIGIWA YASUTOMO 森際 康友 (61)	法学研究科総合法政専攻・教授	法哲学 法学修士	法テキストの研究と教育			
OGAWA MASAHIRO 小川 正廣 (60)	文学研究科人文学専攻・教授	西洋古典学 博士(文学)	西洋古典テキストの研究と教育			
ABE YASURO 阿部 泰郎 (58)	文学研究科人文学専攻・教授	日本中世宗教文芸 文学修士	日本中世宗教写本テキストの研究と教育			
NAGAO SHIN-ICHI 長尾 伸一 (57)	経済学研究科社会経済システム専攻・教授	経済思想史 博士(経済学)	経済思想テキストの研究と教育			
HURUOYA TOMOHIRO 古尾谷 知浩 (44)	文学研究科人文学専攻・准教授	日本古代史 博士(文学)	日本古代歴史テキストの研究と教育			
SHIGEMI SHINYA 重見 晋也 (43)	文学研究科人文学専攻・准教授	テキスト学 文学修士	電子テキストの研究と教育			
KANO OSAMU 加納 修 (42) (H20. 3. 18追加)	文学研究科人文学専攻・准教授	西洋中世史学 博士(文学)	西洋中世歴史テキストの研究と教育			
MIYACHI ASAKO 宮地 朝子 (40) (H20. 3. 18追加)	文学研究科人文学専攻・准教授	古代日本語・日本語学説史 博士(文学)	日本古代言語テキストの研究と教育			
KANAYAMA YASUHIRA 金山 弥平 (57) (H21. 4. 21追加)	文学研究科人文学専攻・教授	ギリシア哲学 博士(文学)	古代ギリシア哲学テキストの研究と教育			
IKEUCHI SATOSHI 池内 敏 (53) (H21. 4. 21追加)	文学研究科人文学専攻・教授	日本史学 博士(文学)	近世東アジア歴史テキストの研究と教育			
OISHI KAZUYOSHI 大石 和欣 (44) (H21. 4. 21追加)	文学研究科人文学専攻・准教授	近代イギリス文学 博士(文学)	近代イギリス文学テキストの研究と教育			
AMANO MASACHIYO 天野 政千代 (58) (H20. 6. 26辞退)	文学研究科人文学専攻・教授	英語統語論・英語史 博士(文学)	言語テキスト・モダリティの研究と教育			
WAZAKI HARUKA 和崎 春日 (62) (H21. 4. 21辞退)	文学研究科人文学専攻・教授	文化人類学 博士(社会学)	儀礼テキストの研究と教育			
MACHIDA KEN 町田 健 (55) (H21. 4. 21辞退)	文学研究科人文学専攻・教授	言語学 文学修士	言語テキスト一般理論の研究と教育			
FAUVERGUE, CLAIRE フォヴェルグ、クレール (47) (H22. 4. 1辞退)	文学研究科人文学専攻・外国人教師	仏哲学 Dr d'université	フランス近代哲学テキストの研究と教育			
GOEBEL, ZANE ゴーベル、ゼーン(44) (H22. 4. 1辞退)	文学研究科人文学専攻・准教授	社会言語学 Ph.D	言語テキスト社会理論の研究と教育			
KAMADA TAKAYUKI 鎌田 隆行 (44) (H22. 10. 13辞退)	文学研究科人文学専攻・講師	仏文学 博士(文学)	フランス近代草稿テキストの研究と教育			

機関（連携先機関）名	名古屋大学		
拠点のプログラム名称	テキスト布置の解釈学的研究と教育		
中核となる専攻等名	文学研究科人文学専攻		
事業推進担当者	（拠点リーダー）	佐藤彰一 特任教授	外 14 名
<p>〔拠点形成の目的〕 本拠点形成事業は、21世紀COEプログラムの成果を継承しながら、言語テキスト群の構造解明を中核理論として、若手研究者の効果的育成を目指すことを目的としている。21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」は、歴史、文学、思想、図像、身振りなど人間社会の多様なテキスト形態を統合的、多角的に解明し、大きな成果を収めた。本拠点形成事業は、教育研究拠点形成という趣旨に照らして、これまで得られたテキスト学の学問的成果を基盤に、人文科学の根源である解釈学の新知見を織り交ぜて、文字・言語テキストの解釈的手法をさらに深化し、「解釈」という知的営為を一新する方法論と教授法を確立することを目指している。新たな視線でテキスト現象を見、その背後にあるコンテキストとテキスト布置を理解する手法を自らの学問的ツールとして体得した若手研究者を育成することが本拠点形成事業の目的である。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕 本拠点形成計画においては、博士課程後期課程学生を対象とした教育体制の拡充と国際化を主眼とした教育面での活動を展開した。また、原資となる国際的学術ネットワークをさらに拡充させつつ、国際研究集会の開催や講演会等を通じて研究活動を推進し、国際競争力のある教育研究拠点の形成を期して一定の成果を得た。</p> <p>（人材育成面） 平成19年度後期より博士課程後期課程学生を対象とした授業科目「テキスト布置解釈学原論」を開講し、本拠点形成事業への学生の積極的な参加を促した。平成20年度からは授業科目を拡充し、「テキスト布置解釈学原論」（半期2単位）に加えて「テキスト布置解釈学各論Ⅰ～Ⅵ」（半期各2単位）を開講するとともに、平成20年度入学生からは「原論」及び「各論」各2単位の取得を課程博士論文提出の必須条件として学生に課すよう授業カリキュラムの整備を行った。また、平成21年度からは英語による授業も追加して開講した。これにより本事業を中心として若手研究者の育成を効率的に推進する基盤を固めるとともに、課程博士論文の提出を効果的に促す体制を整えた。</p> <p>こうした教育制度改革の取り組みと並行して、平成19年度からは若手研究者育成の対象となっている博士課程後期課程の課程博士論文執筆に対する支援事業も展開した。具体的には、論文顕彰制度「グローバルCOE論文賞」および課程博士論文作成支援制度「大学院学生海外派遣事業」の創設である。「論文賞」については、グローバルCOE学術委員会の下においた論文賞選考委員会が審査を行い、5年間で計9編の論文を顕彰した。「海外派遣事業」については、グローバルCOE学術委員会の下においた海外派遣事業選考委員会が審査し、5年間で計13名の計画を選定して研究助成を行った。学位論文を作成している大学院学生がこれらの制度を有効に活用することで、国際的にみても質の高い課程博士論文の提出を促すことに成功した。また、ポスドク研究員に対しても、月1回の頻度で研究ブリーフィングを実施、海外での研究発表および研究に必要と認められた海外調査に対する助成などを通じて、ポスドク研究員の研究の質の向上を促した。その結果、事業期間中13名のポスドク研究員から9名が大学に研究者として奉職した。</p> <p>（研究活動面） 研究活動としては、海外の著名な研究者を招へいし講演会および国際ワークショップを開催した。講演会ではのべ20名が34回の講演をおこなった。ワークショップではフランスから2名の研究者を招へいし、本学の博士課程後期課程学生およびポスドク研究員に加えて学外からの参加者も得て活発な討議がおこなわれ、教育研究拠点としての存在感を国内外に強くアピールすることができた。国際研究集会については、これを国内外で計14回（国内：10回、海外：4回〔うち共催1回〕）組織・開催しプロシーディングスを刊行済みである。また、5年間の研究活動の総括として、『テキストの解釈学』（水声社、平成24年3月）を研究サブリーダーの松澤教授のイニシアチブにより刊行した。</p> <p>（その他） 本事業では教育研究活動の成果を発信する媒体として研究論集『HERSETEC』を毎年発行した。論文顕彰制度で採択された論文も同誌に掲載している。市民向けに成果を還元する機会としてオープン・レクチャーを開催し、補助事業期間中42回開催した。</p> <p>また、本事業のすべての活動について、Webとメール・マガジン（全54号）に加えて、広報誌『GCOE Newsletter』（全15号）を発行し、拠点内外へむけた情報発信を積極的におこなった。</p>			

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

本拠点形成事業は、テキスト布置解釈学という新しい学問的ツールを研究活動によって生みだし、その研究成果を21世紀COEプログラムの成果と同プログラムにおいて培われた国際的な学術ネットワークを通して精力的に発信しつつ、テキスト布置解釈学を体得した若手研究者の育成を目的としている。

国際的に卓越した拠点形成の人材育成面の成果としては、原資となった国際的な学術ネットワークの拡充を筆頭にあげることができる。本拠点形成事業が21世紀COEプログラムから継承した学術ネットワークは、研究者個人のつながりを頼りに、研究活動を中心とする特徴があったのに対して、本事業では組織としてのつながり、人材育成システム同士のつながりという点に焦点をおき、学術交流協定の締結を積極的に進め、平成20年度にはプロヴァンス大学（フランス）と、平成21年度にはパリ東大学（フランス）および国立清華大学（台湾）との間に博士課程後期課程学生の人材育成面に絞った学術交流協定を締結するに至った。

この協定を基盤にした学術交流もおこない、本拠点が主催した第5回国際研究集会『知のテキスト化』を平成21年3月にパリ東大学およびフランス国立図書館リシュリュー館にて開催し、同研究集会の報告書をパリ東大学のセジャンゼール教授と本拠点研究サブリーダーである松澤和宏教授との共編でPresses universitaires de Strasbourgから刊行した。パリ東大学とは、松澤教授の招へい（平成20年6月から1カ月間）や本拠点の博士課程後期課程学生1名の留学など、具体的な交流成果を上げている。

清華大学との学術交流協定は、平成20年度に同大学から本拠点へと寄せられた協定締結に関する積極的な依頼に端を発している。学術交流としては、平成21年11月に同大学が本拠点の事業推進担当者である重見准教授を招へいし講演会を開催し、平成22年2月に同大学の前研究科長であり台湾で最も重要な学術機関である中央研究院メンバーでもある黄一農教授を、本拠点が招へいして講演会を開催した実績がある。

平成20年度に締結したプロヴァンス大学との学術交流協定に際して、同大学からの若手研究者の受け入れを念頭に、いくつかの制度改革を実行することになった。具体的には、10月入学制度の導入やダブル・ディグリー制度の導入である。ダブル・ディグリー制度については、大学の制度変更が間に合わず交流協定の締結には間に合わなかったものの、本事業の国際化への取り組みが大学全体の教育制度改革に一石を投じることとなった。これらの制度改革を経て、平成22年10月にプロヴァンス大学より学生1名を本拠点に受け入れた。また、協定締結に先んじて平成20年1月には教育サブリーダーの釘貫亨教授がプロヴァンス大学の学位審査に審査員として招へいされており、本拠点形成事業の人材育成面が国際的に認知されていることの証となっている。

拠点形成事業の研究面とも関連するが、国際研究集会への招へいを除いた研究者の招へいものべ22名を数え、国別内訳も欧米にとどまらずオーストラリアや台湾からも研究者を招いており、本拠点形成事業の示す視野の広い学術的関心に対する国際的な賛同を確認することができる。

研究活動においても、本事業の国際的な拠点形成の取り組みが成果を生んでいることは言を俟たない。特に国際研究集会の開催回数は主催したもので13回を数え、そのうち3回は海外（第5回フランス、第8回チェコ、第10回ドイツ・フランス）で開催している。また国際研究集会の事後報告書も、基本的に欧文と日本語の両方を掲載する体裁をとっており、これにより日本に関わる研究であっても、海外へ向けて発信できるよう配慮した。さらに事後報告書のうち4編は、学術出版の分野で定評のある欧米の出版社（第1回Peter Lang、第5回Presses universitaires de Strasbourg、第7回MIT、第10回Springer）から刊行されており、本事業で推進されている研究が国際的水準に見合っていることを裏付けている。

また、学術交流協定を締結したプロヴァンス大学との交流に関して付言すると、同大学が主催した国際研究集会へ本拠点から2名の事業推進担当者が招へいされ発表をおこなっており、本拠点形成事業の取り組みが国際的に認知されていることを物語っている。

そして本事業が5年間にわたって積極的に活動してきた何よりの成果は、本拠点から国際的に発信された研究成果に対する肯定的な評価に認めることができるのであり、一例としてPresses universitaires de Strasbourgより刊行された第5回国際研究集会報告書がInstitut des textes et manuscrits modernesのフローベール・グループ（ITEM/CNRS-ENS ; UMR 8132）により発行されているオンライン・ジャーナルの書評で取り上げられ、非常に高い評価を与えられている。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	名古屋大学	拠点番号	D06
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	テキスト布置の解釈学的研究と教育		
中核となる専攻等名	文学研究科人文学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)佐藤 彰一		外 14 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援について、大学は本事業を全学の将来構想の中に位置付け、教育研究の高度化・国際化を果たすために必要な支援が行われたと評価できる。しかし補助事業終了後、大学としてセンター等の設置といった持続的な支援を続けていくかどうかは必ずしも明確でない。

拠点形成全体については、運営マネジメント体制がよく機能し、拠点形成計画の目的達成を可能にした。国内外で13回に及ぶ質の高い国際研究集会を開催し、ヨーロッパではフランスの2大学、アジアでは台湾の大学と学術交流協定を締結し、教育研究の両面で国際学術ネットワークを拡充した。また、ダブル・ディグリー制度の導入を可能にするために学内の制度改革に努め、国際競争力のある大学作りに貢献した。

人材育成面については、本事業の理念である「テキスト布置解釈学」を軸とする授業カリキュラムを整備して、博士後期課程学生の育成を行うとともに、優秀な認定論文を顕彰する「グローバルCOE論文賞」、及び国際的な研究遂行能力の涵養を目指す「大学院学生海外派遣制度」を創設することによって若手研究者のインセンティブを高めるとともに、国際的な舞台で研究成果を生み出し、各種学術賞の受賞者を輩出している。ただし、彼らの研究にテキスト布置解釈学そのものがどのように生かされているかは不明確である。

研究活動面については、国際研究集会を数多く開催し、その成果をプロシーディングスとして公表し、その中のいくつかは定評ある海外の出版社から刊行されている。また欧文と和文の研究論集を10編刊行したが、ここには若手研究者の成果ばかりでなく、海外から招聘した研究者の講演も収録されており、2度の外部評価でも質の高さが認められている。ただし「テキスト布置解釈学」が、対象となった多様なテキスト群の研究において指導理念として十分に機能したかどうかは必ずしも明らかでない。

今後の展望については、本事業は人文学の分野で国際的に卓越した教育研究拠点を形成することに成功したと評価できるが、補助事業終了後も大学からの継続的な支援が受けられるかどうか、懸念が残る。大学による支援及び外部資金の獲得が強く望まれる。